

発
火

美
帆

画面に映し出される天空の轍は、穢れの全てを残して消えてゆく。一人大気圏への脱出を図り安堵する。

そういうひとなのだ。

あのひとは。

「純哉、聞いてる」

「あ」

上を向いて僕は固まった。高野さんの顔が目の前にあったから。近い。近すぎる。眼鏡の奥の網膜の線が見えるほどだ。あのときを思い出して頭をかいた。ひとはあせると意図しない行動に出るらしい。仕草の無意味さが妙に恥ずかしくて、背に冷たい汗が出る。

「聞いて、ますよ」

デスクの端のシャーペンを取るふりをして顔をそむけた。直にじゃ答えられない。ついでに窓を見て、気づかれぬように呼吸を整えてワンクッションおかないと。耳とか、頬とか、鼓動が。やばい。

「うそつけ」

「嘘じゃないって」

「全然こっち見てなかったじゃん」

「それでもないですって」

僕は改めて息を吸い直し、再度高野さんを見た。銀縁メガネの奥の目を細め、このひとにしては意地悪な顔をしている。

穏やかで、常に笑みを称えているような表情。親切で温かくて、でも実際はそうでもないところも山ほどあり、仲がよくなると、ひとの古傷を持ち出していじったり、ゼミの女の子がいかにブス

ばかりかこと細やかに話してくれたりする。けど、でも、そこも魅力で。

「僕ね、マジで話聞いてるとき、なんか顔をそむけちゃうんですよ」

これは嘘じゃないけどこの瞬間は嘘だった。また目をそらす。窓の向こうに巨大な壁があった。いや、実際はサンシャイン。あまりに近い六十階建のビルは屋上のネオンが窓に映りSFモノの秘密基地みたいになっている。壁のどこかが突然割れて開き、中からロボットが出てきたりして。って、こんなところでそんなん出て来てどうするんだ。逆に皆困るだろ。

と、僕はここの非現実的な夜景が好きで、空想——とか妄想——しながら眺めることが多いんだけど、今はちょっとしたしどろもどろ回避先。

「やっぱこっち見てないじゃん」

「違いますって」

ここは新書と雑多なムック本が売りのエムアイ出版株式会社会議室。

五階建ビルのうち一二階のみを貸りている。大手は千代田辺りにどでかいビルを持っているのが普通だから、いくつかの雑誌を経験したライターの僕は、最初、エムアイのあまりの小ささに驚いた。学生時代どうしても編集者になりたいといっていた高野さんが働いていると思うと、少し胸が痛くなったりもした。歌手目指してAV女優になっちゃった女の子、みたいな落ちぶれ感満載で。ただ、なんでも、社長は元大手漫画雑誌で辣腕を振った編集長。自分の好きなことをするため独立し、ここをスタートさせてらしい。実は他にいいとこ決まってたんだけど面接で口説かれて

安定より冒険を選んだんだよ、というのが高野さんの話。本当かどうかはわからないが、事実、昨年は新書で二冊ミリオンセラーを叩き出した。来年あたり、ここの出版社もこの貸しビルとはお別れし、とうとう持ちビルを建てるかもしれない。

「まあいいや。そんでさ、取材はこの辺りでいいよな」

デスクの上にはB4のレイアウト用紙。四角の枠の中に再来週発刊予定のムック本ラフがあった。高野さんは右手の製図用のペンを器用に回している。ああ、これ、僕いまだに出来ないんだよな。

今、午前一時。奥まった小さな会議室は僕と彼だけ。

会話とペンが走る音と共に端のテレビから音声が響いている。

仕事中だから、音はないほうがいい。特にアイデア出しのときは。

しかし今日だけは、特別、だった。

「お前、将来何かしたいか思ってた」

高野さんはいった。なんだよ突然。

「さあ」

首をかしげた。打ち合わせと関係なさすぎて、卓球少女みたいな受け答えになる。ああもう、僕、本当不意打ちに弱いな。

「夢ってさあ、結構叶うよな。落としたと思った女は落とせるし」

「そう、ですね」

例えに下卑た話をちよっぴり割り込ませる。優男の印象がこういうところで覆るのをこのひとは知っている。

高野さんはペンを持っていない方の人差し指で胸ポケットを叩いていた。マイルドセブンが透けて見える。禁煙場所のこのひとの癖だ。

「うーん」

編集者の仕事にいちいち注目しつつ、そういえば。と思った。確かに行きたいと思った学校は入れたし、夢だったライターにもなれた。何も必死に努力したわけでも強く願ったわけでもない。分かってたから。常に妥当な選択をして、それに満足していられただけで。おそらく、手に入れやすかったのだ。適当な偏差値、それ相応の文章力。自分に似合ったものを選んだだけ。

「そんな大それた夢は見えてませんでしたし」

一つをのぞいて。

そこなんだよ。と、高野さんは僕を指差した。このひとは気が乗ったときよくこうする。僕の内面のざわつきに気づかずにうんうんうなずいて話しはじめた。

「人間って自分に合った夢しかみないよな。俺は猛烈に出版社で働きたいと思ったけど、アイドルになりたいと思ったことなかったし」

「確かに、似合いませんよ」

突然どうしたのだろうこのひとは。

週末だし、このところ徹夜続きというし。疲れているんだろうか。まあ僕も変わらないけれど。ここのとこありがたくも仕事が多くてあんまし眠れていない。

「いや、なんかさ。あいつもそうだと思ってさ」

高野さんは首をしゃくった。テレビに向かって。画面はＬ－ＶＥと銘打ち、真っ青な空を映し出している。その中に、ロケットと飛行士達。

ああ。なるほどね。ふうん。

結局そっちな。

「俺がこの仕事に就いたように、あいつは宇宙飛行士目指しただけなんだろうなって思ってた。夢なんて、所詮現実の範囲内ってことだ。あいつはきつと編集者なんか目指せない」

「確かに星山さん、文章、下手でしたしね」
「だろ」

彼は笑った。ああ、相変わらずいい顔するなあ。この笑顔に弱い。それに、少し間違うと劣等感の正当化みたいな会話をそよ風みたいにしてみようとことか。

やっぱりいいなあ、このひと。

大学卒業して五年経つのに、なんでこんなに変わらないんだ。僕は胸に、やすりで搔いたような痛みを感じた。じんわりと来て、後に残って傷跡になるような。

あ、でも。そういうのよくないって。やめようよ。

(もっと喜べばいいじゃないか)

あのとき以来の二人きりなんだから。

「発射、まだかな」

「かなりかかりそうですよ。今偉そうなひとがしゃべってるし」
「偉そうって、とりあえず俺達よりは偉いだろ」

画面をちらちら見ながらも話を進める。ラフには高野さんの左上がりのクセのある字で、「GWオススメ東京グルメスポット」原宿・表参道編」と書いてあった。首都圏コンビニ売り専用のガイド本。僕も明日は取材で青山や神宮、少し足を伸ばして世田谷あたりを回る。といっても、デジカメと名刺を片手にカフェやレストランを歩くだけだけど。東京グルメといいながらそんなに物を食べるわけでもない。そもそも東京の店の売りは内装と雰囲気。味じゃないしね。実は。

「GW合わせだとお台場とかも魅力的だと思いますけど、載せなくていいんですか」

あえてなぜ原宿・表参道かというと、単に高野さんのマンションが近いから。

「ああ、いいよ。そこいらは。だって、食べに行くスポットじゃないし」

「うそつきー。行くの面倒くさいんでしょ」

「あ、バレた」

本の特集はこうやって個人的な理由で決められていることが結構ある。何より高野さんが取材先リストに入れる店はどれもこのひとの行きつけの場所ばかりだった。

「そういえば次さあ、「昭和の犯罪」とかいう企画もあるけど、そっちも書く」

グルメスポットの次にそれ。雑多すぎるけど、これがフリーライター宿命。これまでも観たこともない舞台のレビュー、古代文明の謎、女の子下着の宣伝もやった。

「まあ、いわれれば」

昼食に誘われたように軽く受ける。簡単には断れない。なんせ原稿用紙一枚五千円。書けるものはなんだって書くスタンスでない、ライターはサラリーマン並の生活さえ送れないのだ。

「ありがたい」

高野さんはこちらにおがむようなポーズをとった。その姿がおかしくて、僕はノリで毒舌を吐いた。

「それにしてもベタなネタばっかですな」

「そういうのウケるんだってコンビ二本は。一応、月曜朝までに頼むよ」

「え、マジですか」

今日は金曜日。しかもすでに一時過ぎ。

「マジマジ」

「このシリーズ文字数かなりありますけど」

ラフを見ると写真キャプションも含め原稿用紙四十枚前後。取材して書くにはかなりの分量だ。だが大学の先輩で編集者でもある高野さんは、後輩でライターの僕にどこまでも強気だった。

「頑張れよ。時間はまだたっぷりあるじゃないか」

「ないじゃないですか。他の仕事もあるの知ってるくせに」

「いいじゃん。あっちは得意の映画レビューだろ」

「まあ、そうですね」

それにしても。

このひととタグを組むのか。

（なんで僕を使おうと思ったんだろう）

こっちは顔を合わせないように気を使い続けたというのに。

（つまりは）

本当におぼえてないんだな、このひと。

宇宙に飛び立った日本人は何人いるのだろうか。

「星山が教えてくれたよ。みんな日本人初の宇宙飛行士を毛利さんだと思ってるみたいだけど、それは違ってたさ。実際はTBSの特派員として行った秋山豊寛なんだって」

「へえ」

「次が毛利さんで、それから向井さん、若田さん、土井さん、野口さん、星出さんが一番最新らしい。ロシアから飛行した秋山さん以外、みんな星山と同じ、あのフロリダ州ケネディ宇宙センタ

ーから宇宙に向かったんだってよ」

画面には先端が黒く全身が白いスペースシャトルが垂直に映っている。二人で打ち合わせも終わり画面を見つめていた。終電は気にしない。今日はそういう流れなのだ。

僕らは星山さんを祝福する。深夜の打ち合わせにはこのためもあった。

オレンジ色のぶ厚い服を着て、彼は周囲に手を振っている。フロリダ州の空は透けるように青い。

「日本の宇宙飛行士の名前を全部覚えていなんて、星山さん、子供みたいですわね」

でも変わったなあ、このひとの外見。元々薄かった髪がキューピーみたいになっているし。

「子供だもん、あいつは」

高野さんは画面を見つめている。

「宇宙飛行士なんて、二十歳過ぎた大人が思い描く夢じゃない。でも、その意味でも俺はあいつを偉いと思う」

「そうですね」

逆に高野さんはあのころから変わらない。口を開けば熱心な信者みたいに親友を褒める。

だからこそ、僕は気づいたんだ。

それを疎ましく思うことに。

画面の向こうの星山さんは歩き出す。

宇宙へ。

「裕一と酒飲んだことあるか、純哉」

突然星山さんにいわれ、僕はおののいた。

「え」

数学科だけに無駄にカンがいいんだという話を聞いたことがあって、しかもあのひとの親友だから、バレたのかと思ったのだ。

「ないです」

「そうだよなあ」

でも違った。カンとは既視感。過去経験したことと照らし合わせ予測するだけで、第六感というものではない。僕はほっとした。そうだ。いくら秀才・星山さんといえど、予測不能のことじゃ気づけるわけない。

同性の後輩が同性の先輩を好きだなんて。

彼はそのまま笑い出す。隣の席にいた美奈子さんに寄りかかるようにして。これはセクハラとかではなく、このひとのクセだ。

「何よ、ホシ君、昨日のこと思い出したの」

「出したよ。だってひでーんだもん」

星山さんどころか美奈子さんも笑う。

日当たりの悪い部屋。いつもむき出しのコンクリートと煙草が混じったにおいがしていた。

ああ。懐かしすぎて胸が痛い。

「なんですか、教えてくださいよ」

星山さんと美奈子さんはひたすら笑っている。僕に教える意図はあるようだが、共に笑いが収まらないらしい。なんだよ。高野さんのことなら早くしてほしい。

「あいつさ、純哉さ、ワイン全然駄目なんだ」

「そうなのよ、それで本気で何も覚えられなくなるらしいのよ」
へえ。

と、最初はそれだけ。

「昨日三人で飲んだんだけど、あまりにあいつが酔っ払ったからあいつのアパートまで送ったんだよ。そしたら上がれ上がれっていわれてさ」

笑いの収まった星山さんは説明してくれたが、途中、裕一は夢中で「ナノ子日記☆」という成人向け漫画のよさを語ったんだ、と話すあたりからまた笑いの発作がはじまり、美奈子さんによりそいっぱなしになった。

「それが熱いのなんの。ナノ子の胸のなさがいいか、とか、成人漫画の行く末とか、くだらないことに妙に熱心で話しが止らなくて」

しかし今日会うと何も覚えていなかったらしい。

「あんなにマジでエロ漫画語る奴初めて見たよっていったら、それ、本当に俺なのかってすごいあせてさ」

思い出したのか、二人はさらに笑う。止まらないらしい。

「いままであんなことなかったんだぜ。いったらさ、酒は好きだけどワインだけは駄目なんだって。全部忘れるからって」

「酒乱もいいとこよ。普段はあんな冷静キャラなのに」

「へえ、見てみたかったなあ」

僕もつられて笑った。笑って、笑って。

途端、気づいた。

「いよいよだな」

「ええ」

星山さんが乗り込んで数分後。スペースシャトルが火花を散らした。

「本当に飛ぶんだなあ、あいつ」

「そうですね。夢を叶えるんですねえ」

そうだ。このひとは天に行くんだ。

そのまま。

二度と戻ってくるな。

あのことろ。

突如自覚した想いに気が狂いそうだった。

毎日毎日高野さんのことを考えた。名前、学科、年齢、携帯番号、メールアドレス。知れば知るほど他のことも気になる。彼女は。付き合った女の数は。聞こうと思えばいつだって聞けたのだ。当時から読書という共通の趣味があったし、仲よくさせてもらっていたし。

でも間にはいつも星山さんがいた。宇宙飛行士を目指すと公言する大学始まって以来の秀才。高野さんはそれでいて冗談が好きで話が面白い同級生の彼をいつもこういつていた。

「俺はあいつが好きなんだ」

僕にはいってくれなかった言葉。

二人の話を聞いて数ヶ月経ったころ、僕は高野さんを誘った。一人五限がある日を狙い、校門で待ち構え。声をかけた。

「あ、まだ講義あったんですか」

高野さんのバイトは休み。しかも星山さんはバイト、同じく同級生的美奈子さんもゼミ発表が近くて多忙。全部知っていた。

「よろしければ飲みませんか。僕、高野さんと二人で飲んだことないや」

「ああ、いいなあ。どうせ俺暇だし」
来た。

「それじゃ、ワインバーでいいですか」

高野さんの顔つきは変わった。それなのに、彼はひるんだ顔を打ち消すように続けた。

「お、いいな、それ」

もちろん計算済み。このひとは酒を飲んでやらかした失態が広まるのを畏れていた。もし僕が誘って嫌がったら理由を説明しなきゃならなくなるから断らない。それ以前に、高野さんは後輩の誘いを無下に断るようなことはしないひとだ。

全部知っていた。それでも、

「でしょう。家の近くに出来て、すぐ行ってみたくて」

「おお、そりゃいいなあ」

余りにスムーズに事が運んだから、僕は心の中で笑った。

そのとき。画面が変わった。

「あ」

二人同時に声をあげた。

「なんで」

高野さんはテレビに倒れこぶように近づく。

「なんでだよ」

切り離しを開始したシャトルが、突如爆発した。

星山さんが。

いるのに。

ひたすらワインを進めると本当に酔っ払ってくれた。

「僕の家泊まってってください」

「ありがたいよ、頼む」

それから結構簡単だった。

スペースシャトルが燃えている。

ちりじりになった破片が花火みたいに周囲に飛び散っていく。

テレビは言葉を失い、真っ青なただの空になった世界を映し出している。

なんていうことだ。

星山さんは発火してしまった。

僕の期待通り。

いっそ全部燃やつくして欲しい。

全部。まっさらに。

あのとき、高野さんの茶色の髪は汗で額にはりついていたのを
おぼえている。初めて間近で見た彼の顔はやっぱり美しくて。

止まらなかった。

「死んだみたいです、星山さん」

華々しい発射の後の絶望が、中継を通じてこちらに伝わってくる。
僕の肌はざわりと音を立ててはぜる。

もういない。星山さんはもういないのだ。

だから。

僕はあのときみたいに彼の指を掴む。高野さんはこちらを見つ

めた。

「なんだ」

「覚えてないんですか」

「何を」

膨張をはじめたそれは、僕の臍を濡らした。喘ぐ言葉が動きを加速させ、全部飲み込んで。あの指。首筋。下に。息を強く吐いて。

溢れ出たミルクセーキが泡を立てて太股を濡らし。僕は満たされた。

「もう邪魔者はいないんです」
だから。

今度こそ愛して欲しい。何度もその目で。

彼のうなじを眺め、たった一度を思い出して。またはじめたい
と思った。

四年前の夜みたく。

なにより星山さんの亡骸の前で。

ねえ、高野さん。

「おい」

「いいでしょう」

「おい」

おいっ。

歓声が上がった。

「え」

テレビだ。僕は一瞬周囲を見回す。

「どうしたんだよ純哉。今ぼうつとしてるときじゃないぜ」

あ。れ。

画面を見る。

星山さんの乗ったスペースシャトルが無事に宇宙へと旅立っていくところだった。

あれ。

全然燃えてない。何も起こっていない。

「え」

切り離し作業で小さくなったそれが空の向こうに消えてく。これから大気圏に入り、宇宙へと向かうところ。

「すげえ、大成功だ。最初怖かったけどさあ、あいつ、本当に宇宙行ったよ」

高野さんはイスから立ちあがり叫んでいた。

「本当に星山はすげえ、すげえよ」

両腕をかかっている。

「あいつ本当にすげえ」

ああ。

そうか。

周りを見回した。僕は両手のひらを見た。

あはは。

何もないや。

目の前の高野さんは親友の夢がかなったことを心底喜んで、騒ぎ立てていた。あらん限りの感嘆詞を並べ、親友を祝福する。

このひと、本当に星山さんが好きなんだなあ。僕よりずうっと畜生。

ひとしきり騒いだ後、彼はこういった。

「俺も星山見習って日本一の編集者になろう。多恵のためにも」え。

「多恵って」

「あ。いってなかったっけ、純哉に」

「経済の代田さんのことですか」

「そうそう、よく覚えてるじゃん」

「別れたんじゃないかなったんですか」

星山さんの前に恨んでいたひとだ。でも交際は一クルルのドラマより短い期間で終わっていたから、気にもしていなかった。

「学生時代はな。でも社会出ると、やっぱりお互いが一番なんじゃないかとか思ってたさ」

「へえ」

「マジで結婚しようかと思ってる」

身体に重石がついたようになる。自分を押しつぶすほどの重量。海に落ちたら一気に沈むくらいの。

へえ。

そうですか。

なのに、高野さんは何も知らず身振り手振りで話してくれる。幸せを分けようとするかのように。

「知ってるか。今回のシャトルが宇宙基地にドッキングするとき、その光が日本からも見えるんだって。今度の打ち合わせのときもさ、一緒に見ないか」

「ええ」

仕方なく僕も笑う。

「そんなときは、多恵にもプロポーズしとく。祝ってくれよな」
「ああ、いいですねえ」

外ではまだ秘密基地みたいなサンシャインが光っている。
でも、そんなこと。

もうどうでもいい。

《了》